

授業の成立

—その前提条件を考える識—

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

授業を成立させるためにはどのような条件が必要であろうか。今回は、その前提条件を考える。

2. 信頼関係(先生と生徒の信頼関係、先生と保護者の信頼関係、生徒と保護者の信頼関係)の樹立が何より。

教育の前提は信頼関係である。「生徒と先生」、「生徒と保護者」、「保護者と先生」、この3つの信頼関係がその内容だ。ここでは先生の立場から生徒および保護者との、信頼関係を築き上げ方を具体的に考えたい。できるだけ形から入ることとする。

①先生は約束を守ること。

〈例〉

- (1) 授業時間前には教える教室に入り、授業開始時間になったら、1秒も遅れず授業に入る。授業終了時刻にビタリと授業を終了させる。
 - * あらかじめ、決められた時間から決められた時間まで、キチンと授業をすることが約束を守ること、信頼関係の樹立の第一歩である。
 - * 授業時間になっても、授業がスタートしない。
 - * 授業時間後もダラダラと延長して授業をしている。
 - * 十分学力のついてない子に授業前や授業後、補習をすることは当然だが、正式授業は遅れて始めたり、時間を延長してはならない。もし、どうしても延長する場合は、「これで一応授業は終了だが、これから〇分間補講をする」と宣言してから実施すること。
- (2) 宿題を出したら必ず見てやる、テストをやると言ったら必ず実施する。「気の毒だからいいや」と出した宿題を見てやらず、やると言ったテストをやらないと、実際に宿題をやってきたり、テストの準備をしてきた生徒は失望する。

②先生は生徒と保護者の名前を覚えていること。

- (1) 生徒の名前は確実に覚えること。Aさんを見てBさんと言ったり、君だれだっけと口にしたら信頼関係は築けない。自分の教えているクラス全員の名字と名前をフルネームできちんと覚え、顔を一致させることが大切だ。(呼び方は「〇〇さん」、「〇〇君」が最も丁寧でよい。いきなり呼びつけでは嫌われることも多い)
- (2) 保護者の名前と顔、声を1日も早く覚え一致させること。子どもの名前だけ覚えても駄目で、保護者とも頻繁に会い、話し、顔と声を覚えること。

③生徒と保護者に先生は自分の名前と顔、声を覚えてもらうこと。

(1)自分は、または、うちの子どもは誰に教わっているのだろうと思われているようでは、信頼関係は構築できない。積極的に「私は〇〇です」と名乗って、先生の名前を生徒と保護者に覚えてもらう努力をすること。

*最も効果的なのが「クラス通信」である。毎月1回「クラスごとの通信」を出し続けてその刊行者として、自分の名前をアピールすること。「〇〇先生から一言」欄をつくり、毎月クラス通信を出し続ければ、2～3ヵ月後に先生の名前を知らない生徒と親は一人もいなくなる。

*電話をかける場合も「こちらは開倫塾ですが」と言わずに、「こちらは開倫塾の〇〇と申しますが」と必ず個人名を口にし、名乗りを上げること。

(2)生徒や生徒の親から「〇〇先生いらっしゃいますか」と名指しの訪問を受けたり、電話を受けたりすることが多くなればなるほど、信頼関係が厚くなったと言える。

④座席表通り着席させること。

生徒は放っておくと、先生から離れた所に着席しがちである。権威から遠ざかりたいという心理のあらわれだと思われる。

左の図のように、後部や左右の座席にピタッとくっつき、前方や中央が空くのが「どこでもいいから着席してね」と言った場合の姿だ。これでは「白け鳥」が飛ぶだけで授業はなかなか成立しない。特に広い教室ならなおさらだ。

また、問題を起こしそうな子どもほど、後方のはじっこに着席することが多い。どの生徒をどの位置に座席させるかは、授業を成立させる上での最大テーマの一つである。先生は正常な授業を成立させるために、最も効果的と思える座席を考え抜き座席表をつくり、その通り生徒を着席させること。

クラスの平均からはなはだしく遅れていたり、進んでいる学力を持つ子は、できるだけ先生の近くに着席させること。その子たちには問題練習などをやらすときには平均の生徒のペースよりもゆっくり、もしくはスピードを上げてやるように、具体的な指示をどんどん出すべきである。平均の子が5題問題をやるときに、学力不足の子に全部やらせようとしても無理なので、やさしい1～2題にするとか、よくできる子は5題では時間が大幅に余ってしまうようだったら少し難しい問題をあらかじめ用意しておき、それをやらすとかして実力に合致した指導をすべきである。(これは次項で述べる Lesson Plan(教案)と関連する。)

子どもたちのプライドを傷つけないように、上手に先生が作成した座席表通り毎回着席させることができれば、1年間その授業は成立し続ける可能性が高まる。

⑤先生が授業内容を十二分に予習し、Lesson Plan(教案)を授業前日の正午までに完成しておくこと。

(1)生徒に「今日は何ページからだったっけ」と質問するようなら、一気に信頼関係は崩れ、明日から誰も塾には来なくなる。

先生が信頼関係をつくり上げる最も大切なことの一つは、「授業の腕を上げること」つまり「教える技術(教育技術)を向上させること」である。ただ、技術論に入る手前で、明日教える

内容は隅から隅まで頭に入れておかねばならない。教科書に書かれている内容はすべて覚えて、口をついて出るようにすることはもちろん、もし問題集を使うなら、明日教える問題はたとえ一年前に一回教えたものでも、もう一度「ノート」に正確に書き直して試みるのが大切だ。生徒は、授業中に先生が一年ぶりに問題を解くのを見て何と思うだろうか。先生の予習不足はすぐに見破られ、もし解き方を間違えたり、計算やスペリング、漢字を間違えたらこれまた一気に信頼を失う。生徒は先生の学力を見に来ているのではない。教わりに来ているのであるから、少なくとも授業の前日までにはすべての教材に目を通し、問題はどんな簡単なものでもすべてノートに終了させておくことが大切だ。技術論はこの後だ。

(2) 授業を成立させる上で最も大切な技術論は Lesson Plan、つまり教案を毎回の授業につきキチンと作成し続けることだ。教案の書き方は大学の教職課程で指導を受け、教育実習で添削などの指導を現場で受けた通りだ。根気強く毎回 Lesson Plan をつくり続けること.これにつける。ベテランほど怠けやすくなる。年配の先生に教わりたくない生徒に言われる理由は、ベテランは自分の授業はこれでいいと自己満足して教案を全くつくらなくなるからだ。

(3) 教案づくりは、クラシックバレエのバーを使った柔軟体操と似ている。あの森下洋子女史でさえ、毎日バーを使った柔軟体操を欠かさないと。教案づくりは先生と呼ばれる人の基本動作中の基本動作だ。

(4) ベテランは十分判っている訳だから、昨年の授業の成功例と失敗例を覚えているはずだ。「昨日よりも今日、今日よりも明日」の精神で、自分自身の授業を一步でも理想のものに近づけるよう、創意工夫を毎日のように行い、それを Lesson Plan の中に盛り込むべきだ。もし行き詰まったら、同僚の先生の授業を見学させてもらったり、上手といわれる授業の先生を訪問して見せてもらったり、新しい理論をどんどん学習したり、外国を視察したり、やることはいくらでもある。

(5) 例えば英語の先生で、私はもう完成の域に近いと思って Lesson Plan を最近書くことを怠けている人は、「第二言語習得理論に基づく英語指導」についてマスターはしているのだろうか。言語学や応用言語学の最新理論は、実際の英語指導つまり Lesson Plan の作成にも大いに参考になる。

故にベテランになっても、先生であり続ける限り最新の理論を毎日勉強し続け、教案は毎回書き続けること。

(6) Lesson Plan は必ずチェック欄を設けて生徒の反応や、次回への課題をその場や、授業終了直後で印象が新しいときに記入しておくこと次年度大いに役立つ。

(7) 授業の準備が不足して先生が生徒の前ではじめて問題を解くようでは、また、何の Lesson Plan もなく授業に臨むようでは、感動や感銘を与えるような授業はできないことはもちろん、生徒や保護者との信頼も築き上げられる可能性は極めて低い。

*十分な準備と、練りに練った Lesson Plan は次の「授業中のおしゃべり防止」とも密接に関連する。

③おしゃべりのない静かな雰囲気をつくり上げることができること。

(1) 「授業を妨害するおしゃべり」が大学や短大を含め、日本国中の教室を徘徊している。その原因は 100%教える側にある。このように考えた方が話は判りやすい。「社会が悪い」「今まで教えていた先生の教育が悪いからだ」、「家庭教育がよくないから」と様々な議論がこの「お

しゃべり問題」にはあり、大学の先生方が単行本を何冊も書くほどになったが、「すべての原因は、その教室で教える先生自身にある。つまり、私が原因でおしゃべりがある」と考えた方がハラも立たないし、努力のしがいもあるというものだ。

(2)その対策は何かといえ、今まで述べた①～⑤にすべて書かせて頂いた通りだ。先生がきちんと生徒を座席表通り着席させ、時間から時間まで生徒一人一人の名前を覚え、声をかけてやりながら十分準備した上で、創意工夫を凝らした Lesson Plan に基づき教えさえすれば「おしゃべり」など生徒はするはずがない。

3. おわりに

ブライト・アイ・セオリー(BRIGHT EYE THEORY) というのがある。先生の目が輝けば生徒の目も輝き、生徒の目が輝けばおのずと勉強もするようになり、学力も身につくという理論だ。先生はよく勉強し、自分自身の目を輝かすことが大事だ。ただ、先生の目を輝かすのは学習塾では塾長、学校であれば校長の仕事となる。学校長の目を輝かすのは教育長の仕事。教育長の目を輝かすのは市町村長の仕事。市町村長の目を輝かすのは、有権者である我々一人一人の市民の義務とまわりまわってなる。先生がなっていない、ダメだというのはなら市民一人一人も教育について関心をもち、考えることがあれば、市町村長や議員の方々に意見書を送り読んで頂き、行政に反映してもらうことも市民社会では大切かと思う。

1997年1月12日、開倫塾来年度採用予定者事前研修会議内容から抜粋—